奈良文化財研究所都城発掘調査部創設 60 周年記念

―よみがえる西大寺金堂院―

第128回

公開講演会

四王堂・薬師金堂の発掘調査

都城発掘調査部 飛鳥・藤原地区考古第三研究室 室長
林　正憲

弥勒金堂の発掘調査

都城発掘調査部 平城地区考古第三研究室 研究員
田中　龍一

西大寺金堂院の復元

都城発掘調査部 飛鳥・藤原地区遺構研究室 室長
鈴木　智大

2023年6月10日(土)
午後1時30分より

定員 250名
事前申込順

会場・平城宮跡資料館 講堂

主催：独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所

【申込み方法】
住所・氏名・年齢・電話番号を明記の上、メールまたは FAX で下記までお申し込みください。
◇Email : kouenkai_nabunken@nich.go.jp　◇FAX : 0742 - 30 - 6750
●参加の可否を回答いたしますので FAX の場合は、FAX 番号をご記入ください。
●メール 1 送信につきお一人さまのお申し込みでお願いします。
（同じメールアドレスを使って複数のお申し込みをしていただいても差し支えありませんが、1 送信につきお一人さまでお願いします。）

平城宮跡資料館
近鉄大和西大寺駅下車・東へ徒歩 10 分
聴講者専用の駐車場はありません

奈良文化財研究所　研究支援推進部
連携推進課　広報企画係
〒630-8577　奈良県奈良市二条町 2-9-1
TEL：0742-30-6753

奈良文化財研究所都城発掘調査部創設 60 周年記念

奈良文化財研究所　第１２８回公開講演会
「よみがえる西大寺金堂院」

令和５年６月１０日（土）

於：平城宮跡資料館　講堂

【プログラム】

１２時３０分　　受付、開場

１３時３０分　　開演（スケジュール説明、講演者の紹介等）

１３時３５分　　奈良文化財研究所長　挨拶

１３時４５分～　講　演

「四王堂・薬師金堂の発掘調査」

都城発掘調査部飛鳥・藤原地区考古第三研究室長

林　　正憲（はやし まさのり）

１４時２５分　　休　憩

１４時３５分～　講　演

「弥勒金堂の発掘調査」

都城発掘調査部平城地区考古第三研究室研究員

田中　龍一（たなか りゅういち）

１５時１５分　　休　憩

１５時２５分～　講　演

「西大寺金堂院の復元」

都城発掘調査部飛鳥・藤原地区遺構研究室長

鈴木　智大（すずき ともひろ）

１６時０５分　終了

目　　次

・講　　演「四王堂・薬師金堂の発掘調査」・・・Ｐ１
都城発掘調査部飛鳥・藤原地区考古第三研究室長　林　　正憲

・講　　演「弥勒金堂の発掘調査」・・・Ｐ９
都城発掘調査部平城地区考古第三研究室研究員　田中　龍一

・講　　演「西大寺金堂院の復元」・・・Ｐ１５
都城発掘調査部飛鳥・藤原地区遺構研究室長　鈴木　智大

四王堂・薬師金堂の発掘調査

都城発掘調査部飛鳥・藤原地区考古第三研究室長 林　正憲

１．西大寺の創建と沿革

２．四王堂の発掘調査（1986・2002 年）

３．薬師金堂の発掘調査（2006・2007 年）

４．食堂院の発掘調査（2006 年）

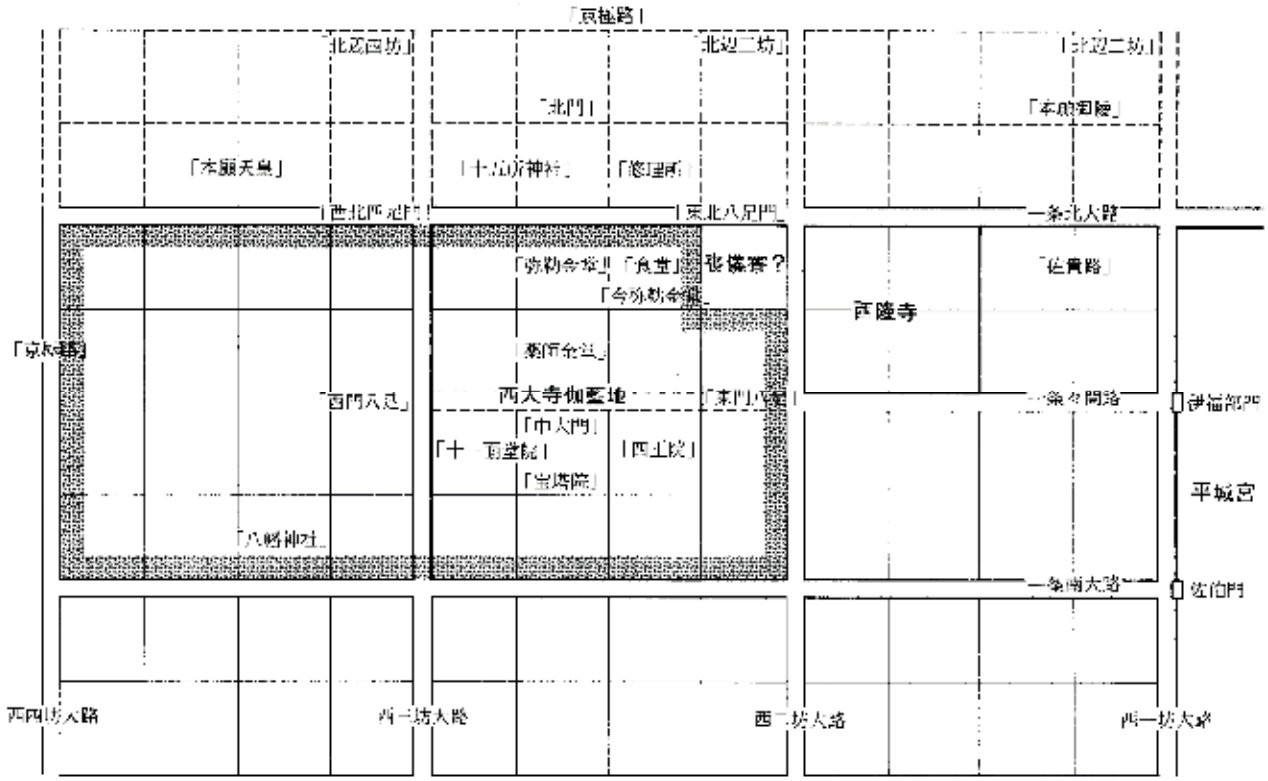

図１　西大寺と周辺条坊の状況

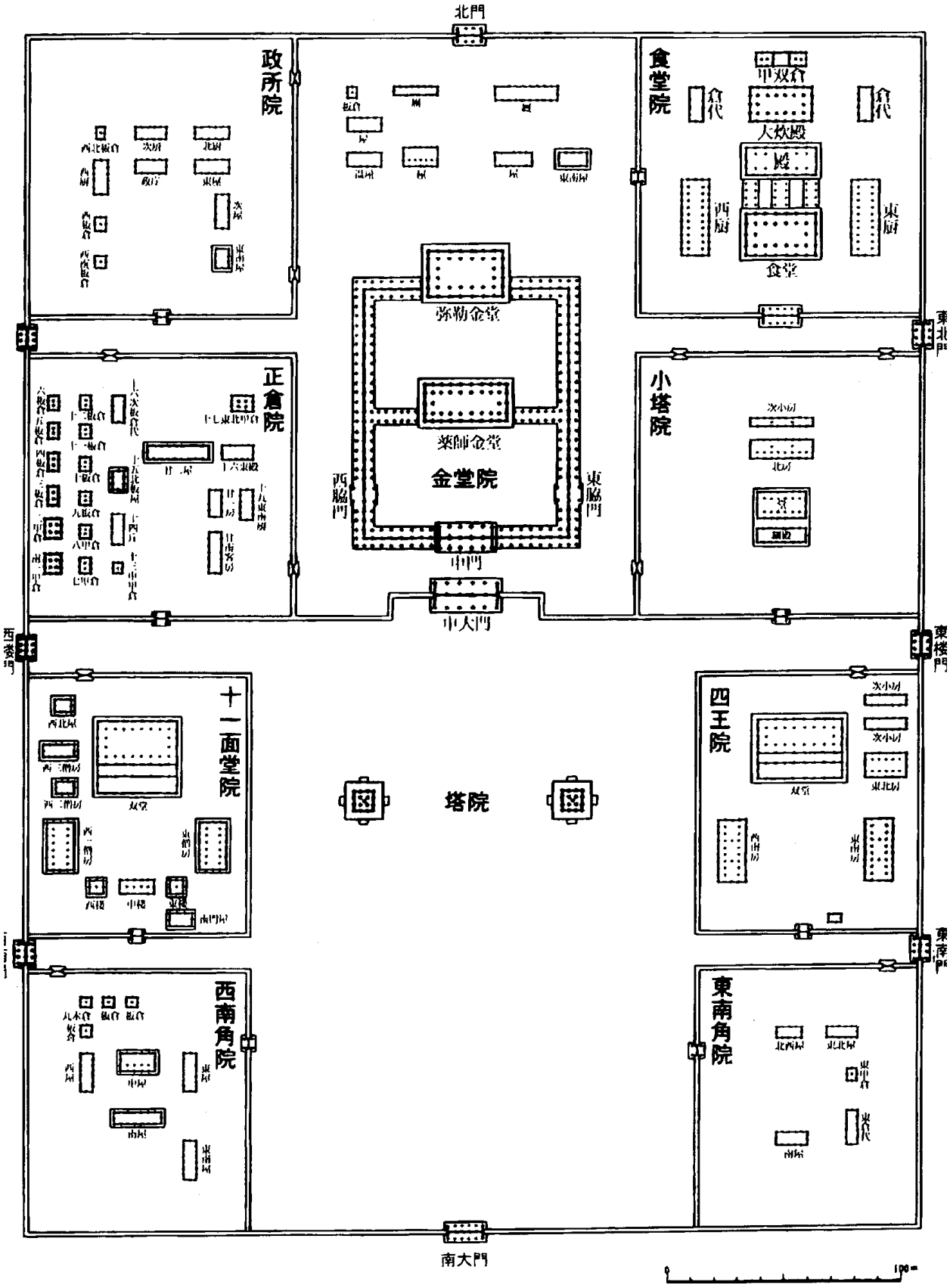

図２　西大寺伽藍・復元図

（宮本長治郎 1983「奈良時代における大安寺・西大寺の造営」『日本古寺美術全集』第６巻を一部改変）

西大寺・略年表

764（天平宝字８）　孝謙太上天皇、藤原仲麻呂の討伐を祈願して、金銅四天王像の造立を発願。

765（天平神護１）　金銅四天王像の鋳造と西大寺の造営を開始。

766（天平神護２）　称徳天皇、西大寺に行幸

＊この頃までに四王堂完成か

767（神護景雲１）　佐伯今毛人を造西大寺司長官に、大伴伯麻呂を同次官に任ず。

769（神護景雲３）　４月、称徳天皇、西大寺に行幸

＊この頃までに薬師金堂完成か

６月、弥勒浄土を作る。

＊弥勒金堂の完成か

770（宝亀１）　東塔の心礎を破却。

＊東塔の設計変更（八角七重から四角五重へ）

772（宝亀３）　西塔に落雷。

＊この頃までに両塔完成

780（宝亀11）　『西大寺資財流記帳』の作成。

＊この頃までに伽藍全体が完成

846（承和13）　薬師金堂か弥勒金堂のいずれかが焼失。　**←　薬師金堂か？**

928（延長６）　塔、落雷により焼失。　**←　西塔か**

962（応和２）　大風雨により食堂倒壊。

1106（嘉承元）　**（弥勒）金堂が大破した**ため、食堂に仏像を安置。

1118（元永１）　この頃までに創建期の建物は大破する。

1138（保延４）　別当勝円によって四王堂が再建される。

1140（保延６）　この頃、食堂（＝弥勒金堂）と四王堂、塔１基のみ残る。

1206（建永１）　東大門の造営。

1235（文暦２）　叡尊が西大寺に入る。以後、西大寺の復興に努める。

＊この間、八角五重石塔・真言堂（現本堂の前身）・僧堂・宝生護国院・護摩堂・西室が造営される

1290（正応３）　叡尊、没する。

1307（徳知２）　食堂（＝弥勒金堂）が炮烙の火による火災で焼失。

1502（文亀２）　兵火により四王堂中門、右塔院、地蔵院、東大門を残し、他の諸堂ことごとく壊滅。

同年、光明真言堂の立柱（＝復興の開始）。

1674（延宝２）　西王堂再建。

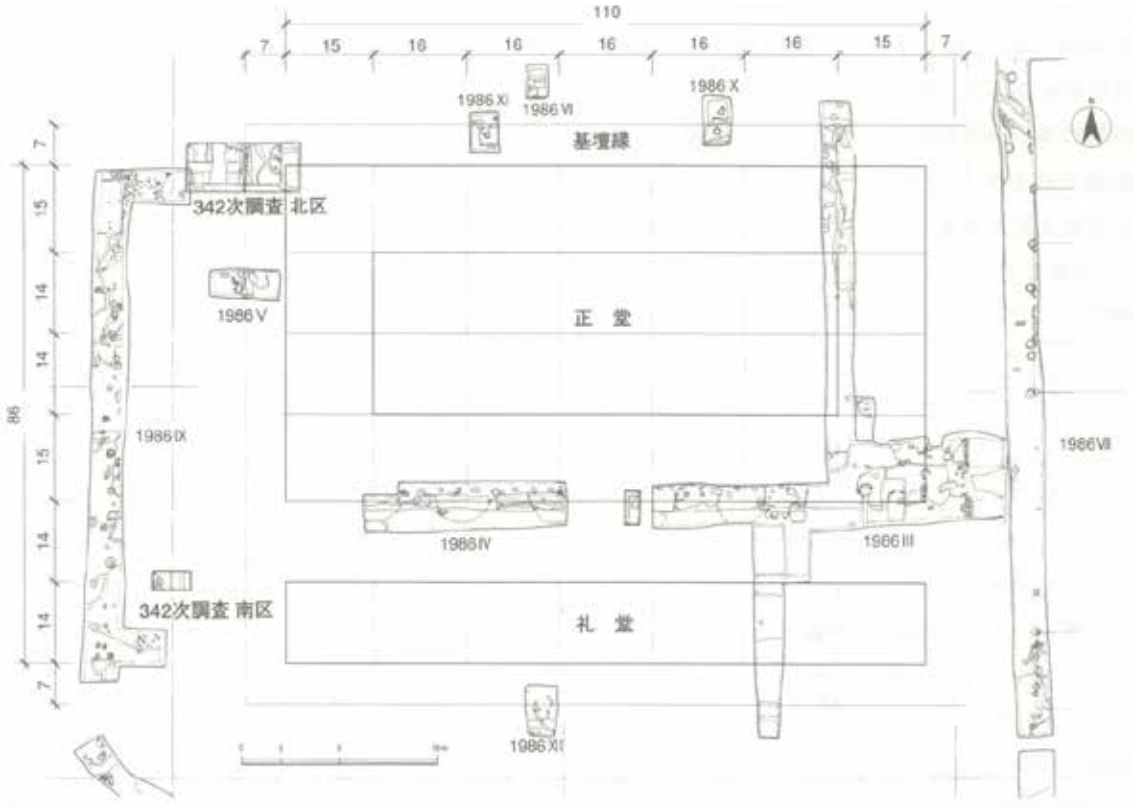

図３　四王堂の復元図

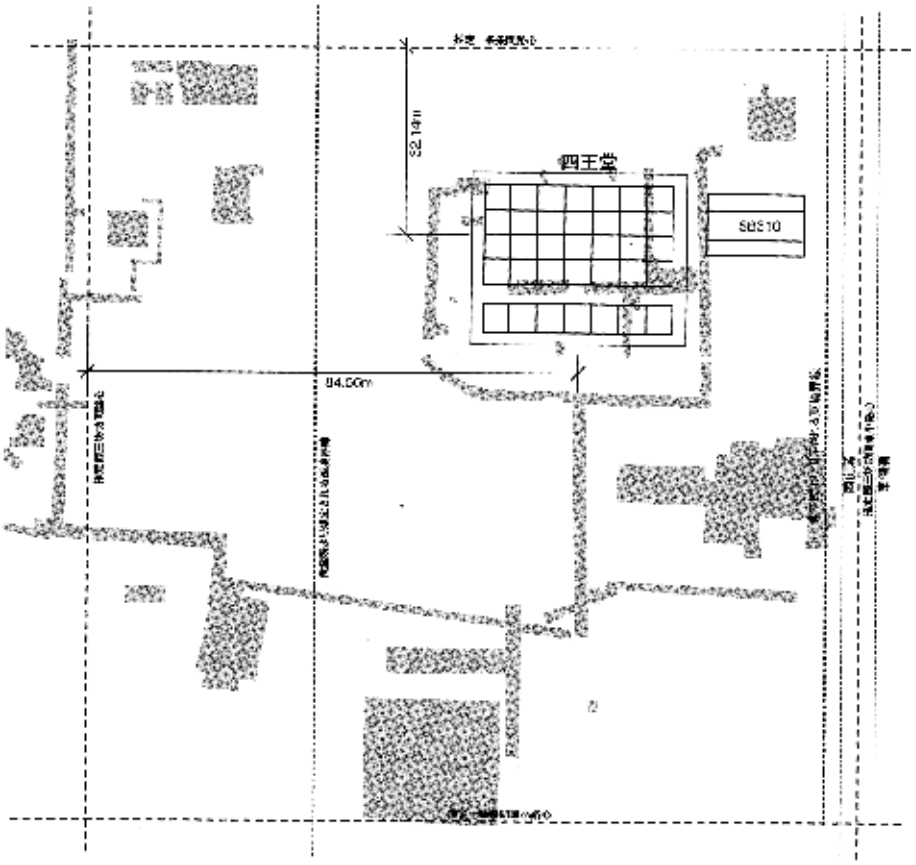

図４　四王堂配置復元図

（大林潤 2012「西大寺伽藍の造営過程に関する検討」『文化財論叢Ⅳ』より）

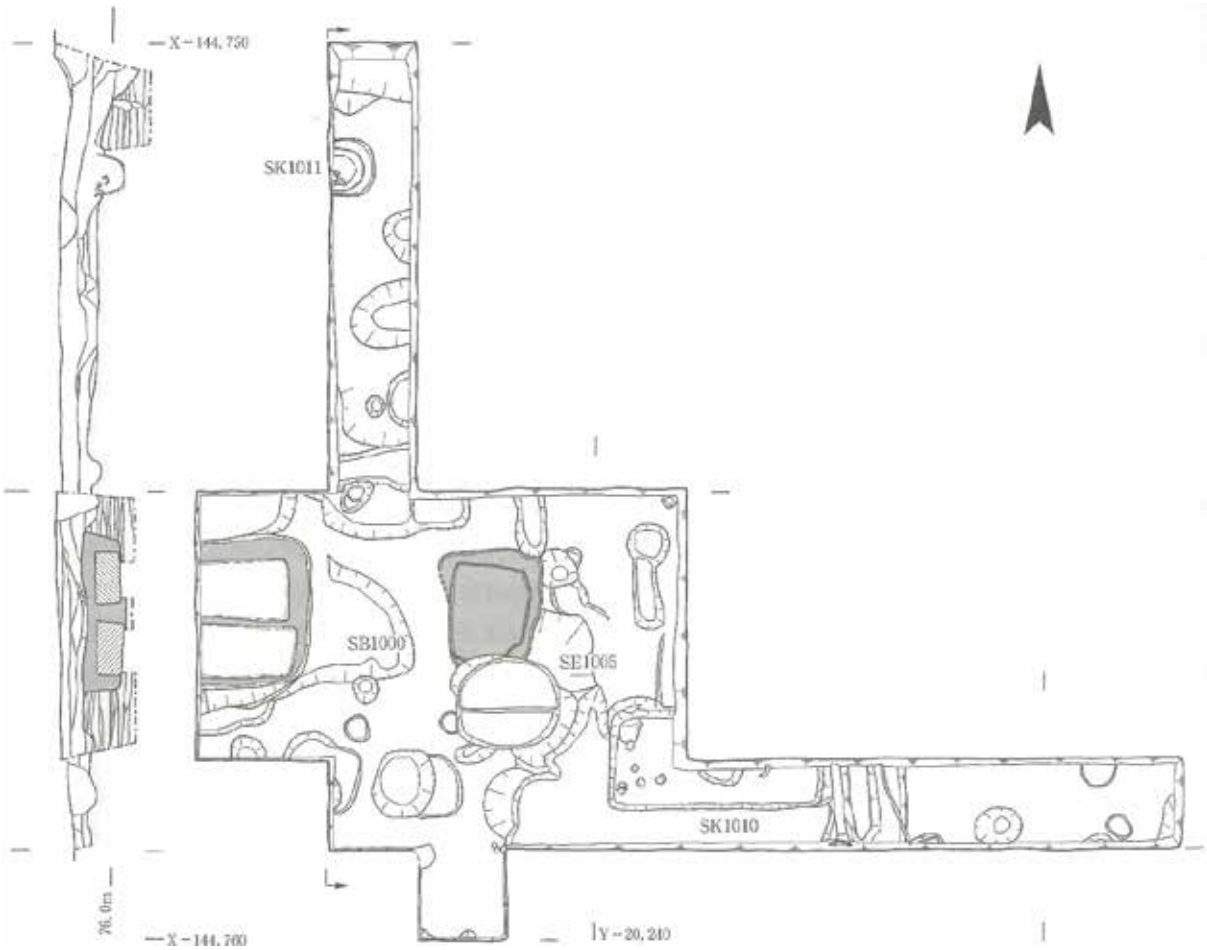

図５　第 409 次調査区平面図・断面図

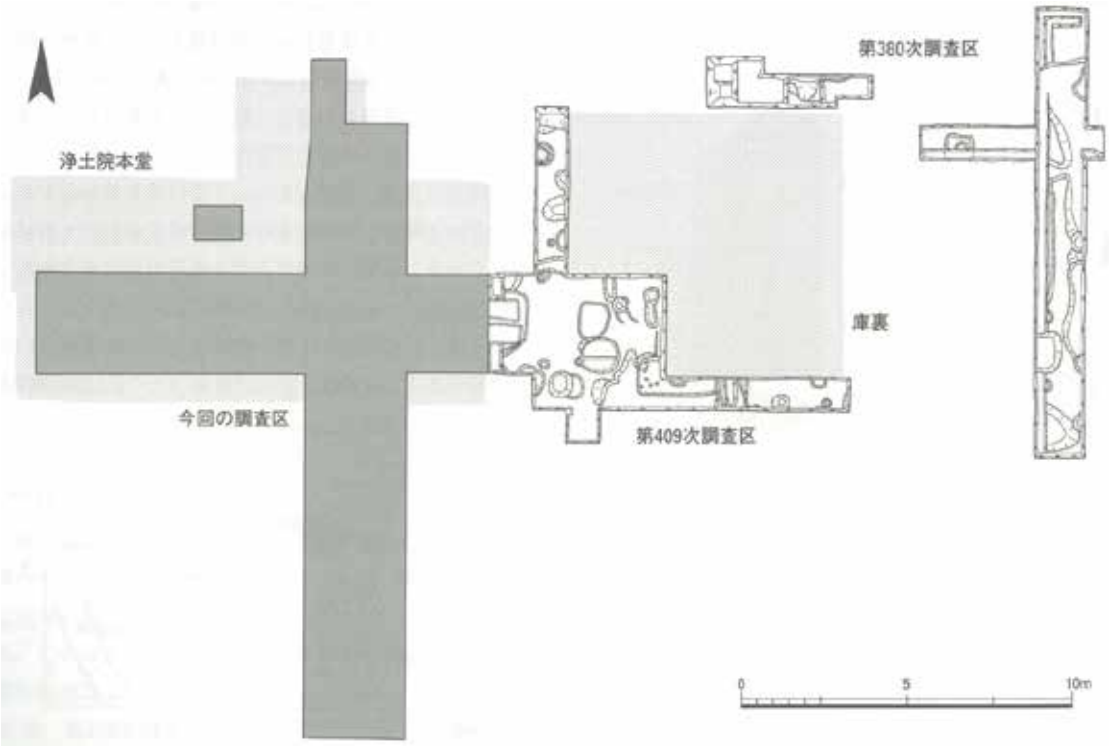

図６　第 422 次調査区位置図

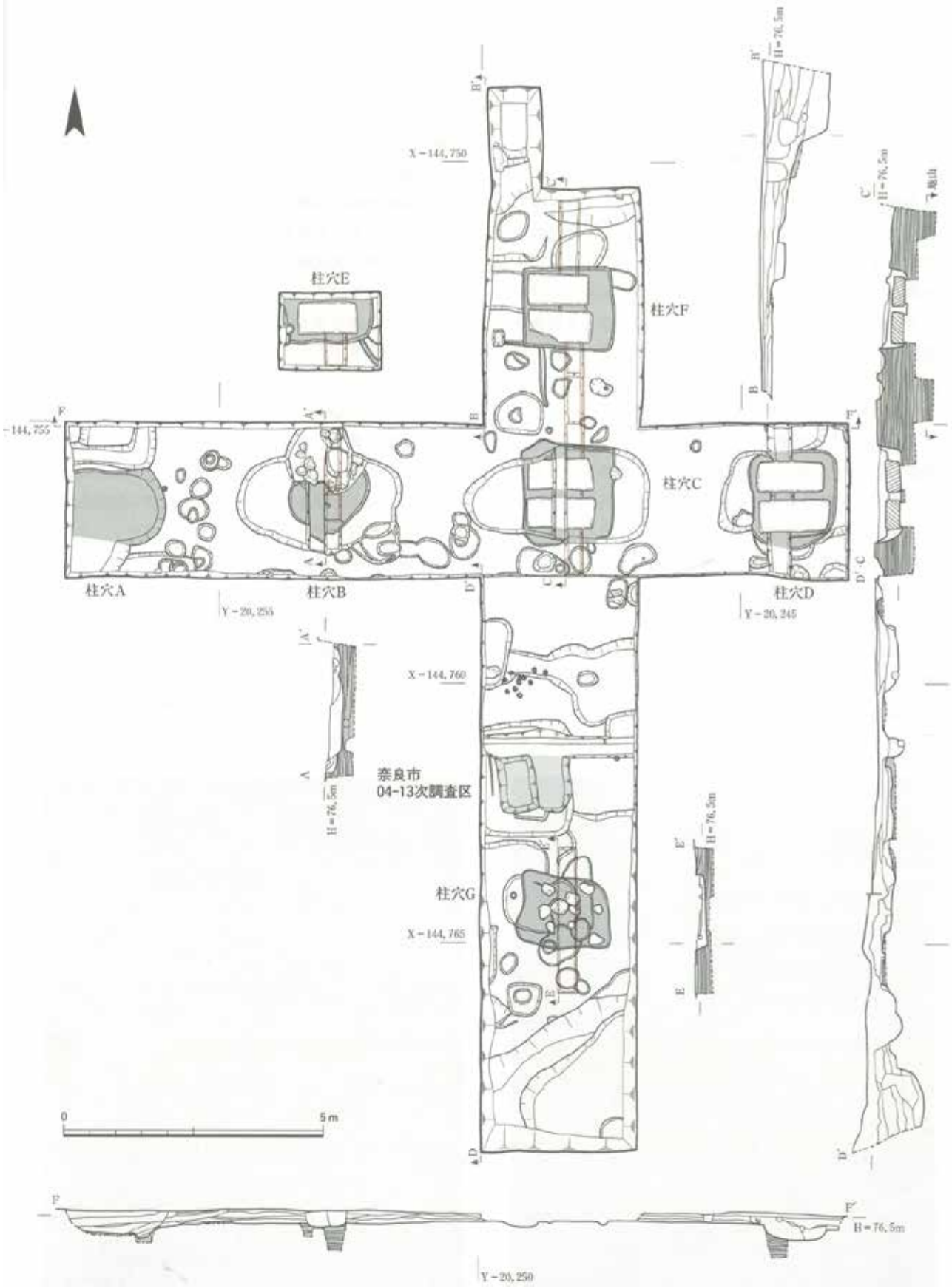

図７　第 422 次調査区平面図・断面図

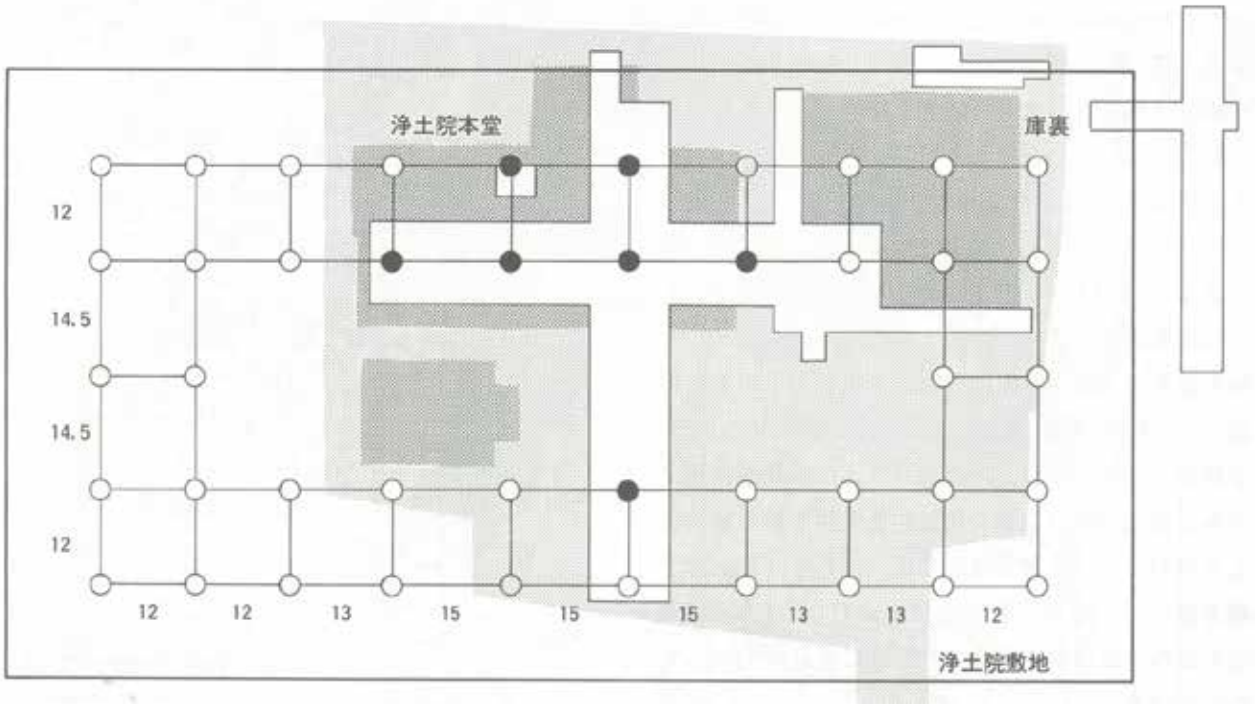

図８　薬師金堂復元図

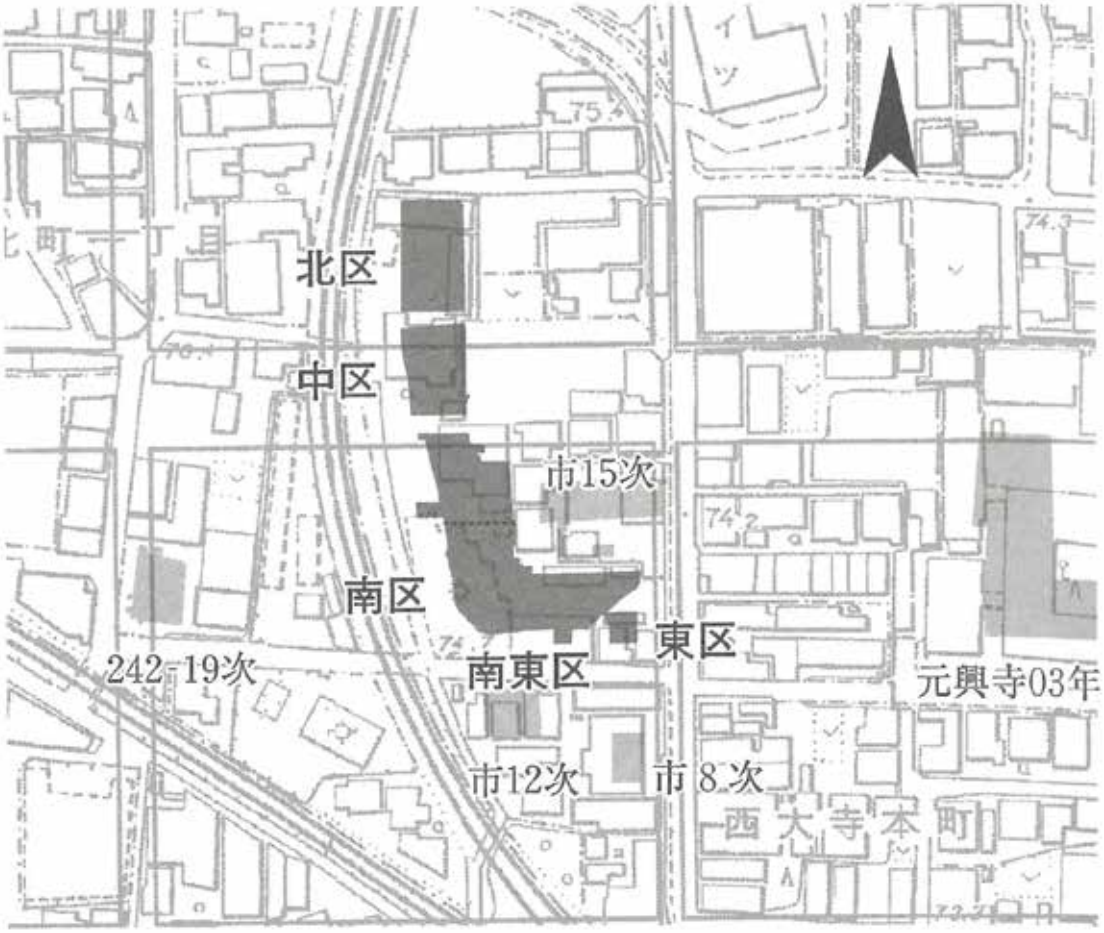

図９　第 404・410・415 次調査区位置図

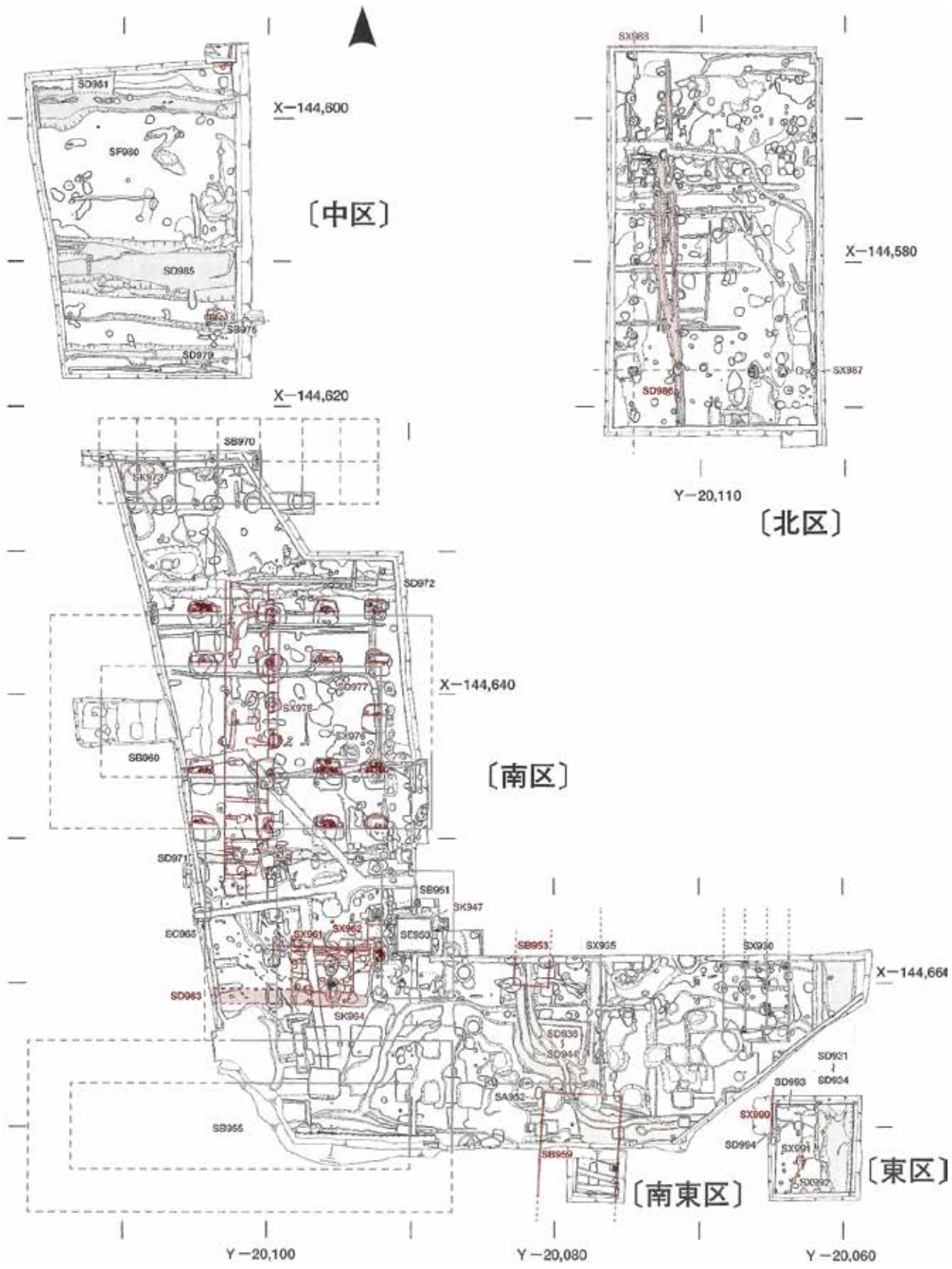

図 10　第 404・410・415 次調査区平面図

弥勒金堂の発掘調査

都城発掘調査部 平城地区考古第三研究室 研究員
田中 龍一

はじめに

2023 年3月、再開発が進みつつある近鉄大和西大寺駅の北西で、西大寺弥勒金堂（みろくこんどう）の発掘調査をおこなった。創建期西大寺の中枢である金堂院は、平安時代のうちに荒廃し、その遺跡は今も市街地の地下に埋もれているが、発掘調査によって徐々にその姿があきらかになりつつある。

弥勒金堂は薬師金堂の北に位置し、文献史料や絵図、周辺の調査成果から、調査地は弥勒金堂の東北隅部分にあたると考えられた。しかし、弥勒金堂推定地の調査は今回が初めてであり、遺構の有無や遺存状況はわかっていなかった。

一か月にわたる発掘調査の結果、弥勒金堂の建物基壇をはじめ、礎石抜取穴（そせきぬきとりあな）、壺地業（つぼじぎょう）といった遺構を発見し、弥勒金堂造営時における大規模工事の実態があきらかとなった。

1. 文献からみた弥勒金堂

1－1.『西大寺資財流記帳』の記述にみる弥勒金堂の規模

東西約32m（長十丈六尺）、南北約20m（広六丈八尺）、二重屋根。

➡規模や外観のイメージは、興福寺中金堂や薬師寺金堂などが参考になる。

1－2. 弥勒金堂の造営と衰退

天平神護元（765）年　西大寺の造営開始

神護景雲3（769）年　弥勒金堂が完成？

嘉承元（1106）年　弥勒金堂が大破。仏像が食堂に移された。

元禄 11（1698）年　「西大寺現存堂舎絵図」が描かれる。「弥勒金堂跡」の文字と礎石らしき描写が認められる（この絵図の信ぴょう性については諸説あり）。

➡平安時代のうちに弥勒金堂は荒廃してしまい、その後再建されなかったと考えられる。

2. 発掘された弥勒金堂

2－1. 基壇土・弥勒金堂造営前の整地土

現地表から30cm ほど掘り下げたところで基壇土を検出した。青灰色を呈する粘質土で、厚さは20～60cm 程度残っていた。

基壇土の下層には、暗褐色の粘質土を確認した。奈良時代の土器や瓦を含んでおり、弥勒金堂造営前の整地土である。

2−2. 礎石抜取穴

基壇の上面で、計6基の巨大な土坑を検出した。直径は3m前後。土坑の規模や、規則的な配置から、弥勒金堂の礎石を抜き取った穴だと考えられる。調査当初はこの土坑が、後述する壺地業ではないかと考えたが、中世〜近世の遺物が出土したことで、弥勒金堂廃絶以降の遺構であることが判明した。

2−3. 壺地業

断ち割り調査を進め、部分的に基壇を掘り下げたところ、礎石抜取穴の真下で、基壇構築の前段階に掘られた穴を6基検出した。この穴は、基壇や礎石抜取穴を検出した面では確認できなかった。隅丸方形を呈し、一辺約3m、深さは最大 1.4m以上もある大規模なもので、大ぶりの石や瓦を用いながら埋められた状況を確認した。以上の特徴から、これらの穴は、礎石を据える箇所の地盤改良を目的とした壺地業であると考えられる。

3. 弥勒金堂の考古学的検討

3−1. 弥勒金堂の柱位置

弥勒金堂の規模や上部構造を考えるうえで、柱位置は重要な要素である。今回の発掘調査では、柱を立てるための礎石は抜き取られていたものの、壺地業によっておおよその位置を推定することが可能である。

今回発見した壺地業の位置は、従来の復元案と比べ、南北方向にズレがみられるものの、東西方向のズレはほとんどないことがわかった（より詳細な検討は、現在実施中）。

3−2. 弥勒金堂基壇の構築過程

土層断面の観察から、弥勒金堂基壇の構築過程が以下のように復元できた。

①西大寺造営前に整地をおこなう

②礎石を据える予定の場所に穴を掘り、石や瓦を入れながら埋め戻す（壺地業）

③基壇土を積みながら、礎石を据える

➡西大寺薬師金堂や金堂院回廊では、基壇構築後に穴を掘って、壺地業と礎石据え付けを一連の作業でおこなっている。

一方で、弥勒金堂の場合は、基壇構築前に穴を掘って壺地業をおこなっており、壺地業と礎石据え付けが別々の作業になっている点で、西大寺の他の堂宇とは異なる工法といえる。

おわりに

弥勒金堂跡はこれまで未調査であり、遺構の遺存状況はわかっていなかった。今回の調査は、限られた面積だったものの、弥勒金堂の遺構が良好な状態で地下に残っていることが確認できた。また、壺地業の配置がわかったことで、弥勒金堂の柱位置を改めて検討することが可能になった。そして、壺地業の施工後に基壇を構築するという特徴的な工法を採用したこともあきらかとなった。

今回の調査成果は、西大寺の造営工事や古代の土木技術を考えるうえで、重要な成果といえる。

【主要参考文献】

青木敬 2022「国分寺造営の土木技術と堂塔―相模・武蔵国分寺の堂塔造営順序の復元をめぐって―」『國學院雑誌』國學院大學、第 123 巻 第4号

諫早直人・小田裕樹・鈴木智大ほか 2014「西大寺旧境内の調査－第 505・第 521 次」『奈良文化財研究所紀要 2014』

林正憲 2007「西大寺薬師金堂の調査－第 409 次」『奈良文化財研究所紀要 2007』

林正憲 2008「西大寺薬師金堂の調査－第 422 次」『奈良文化財研究所紀要 2008』

奈文研紀要 2007　奈文研紀要 2008　奈文研紀要 2014

過去の紀要は全国遺跡報告総覧（https://sitereports.nabunken.go.jp/ja）でダウンロード可能です。

【挿図出典】

いずれも奈文研作成・撮影

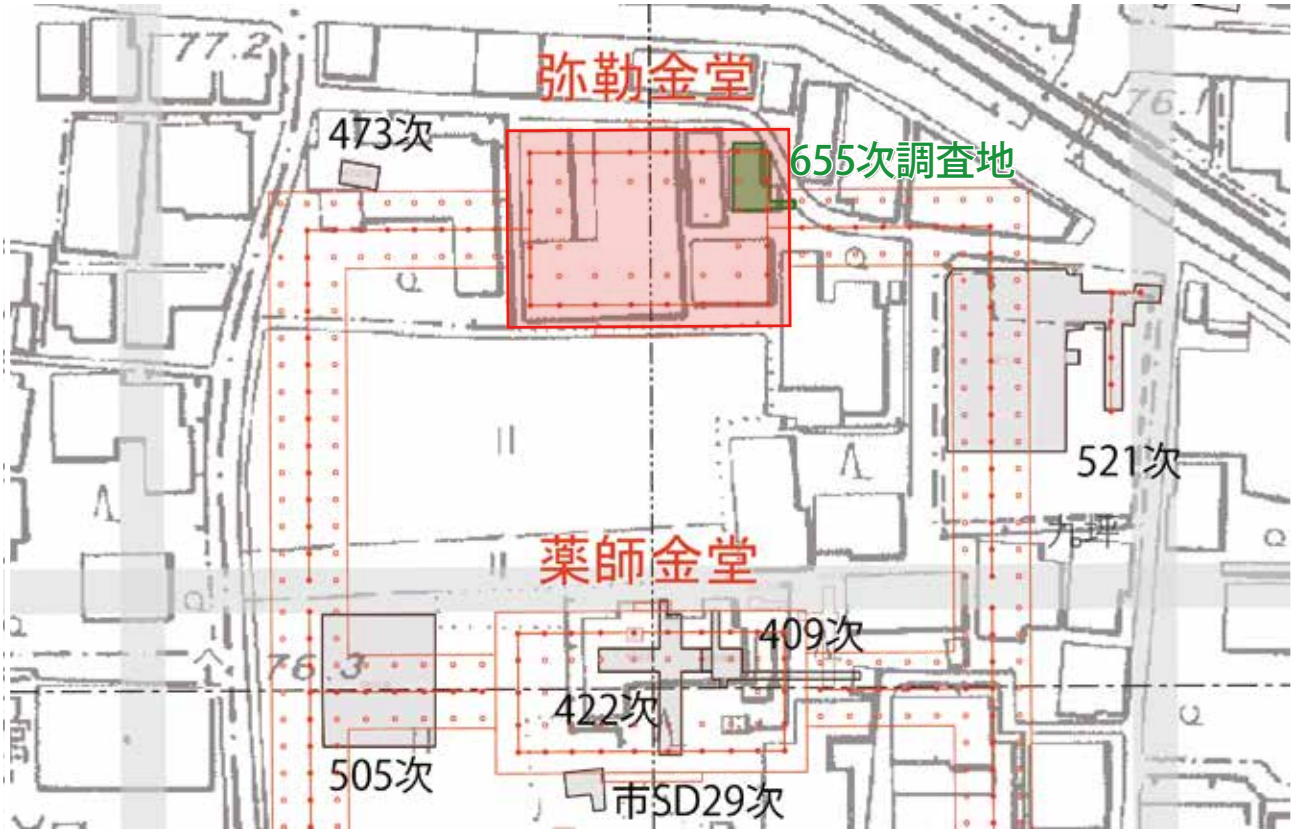

図1．655 次調査位置図

図2．西大寺金堂院復元 CG

【公式】なぶんけんチャンネル
平城京のまちなみ紹介～奈良時代の都のしくみ～
（https://youtu.be/rpTJSJ58WXE）より

写真1．655 次調査 調査区全景（北から）

写真2．礎石抜取穴Ｄ・壺地業Ｄ（北東から）

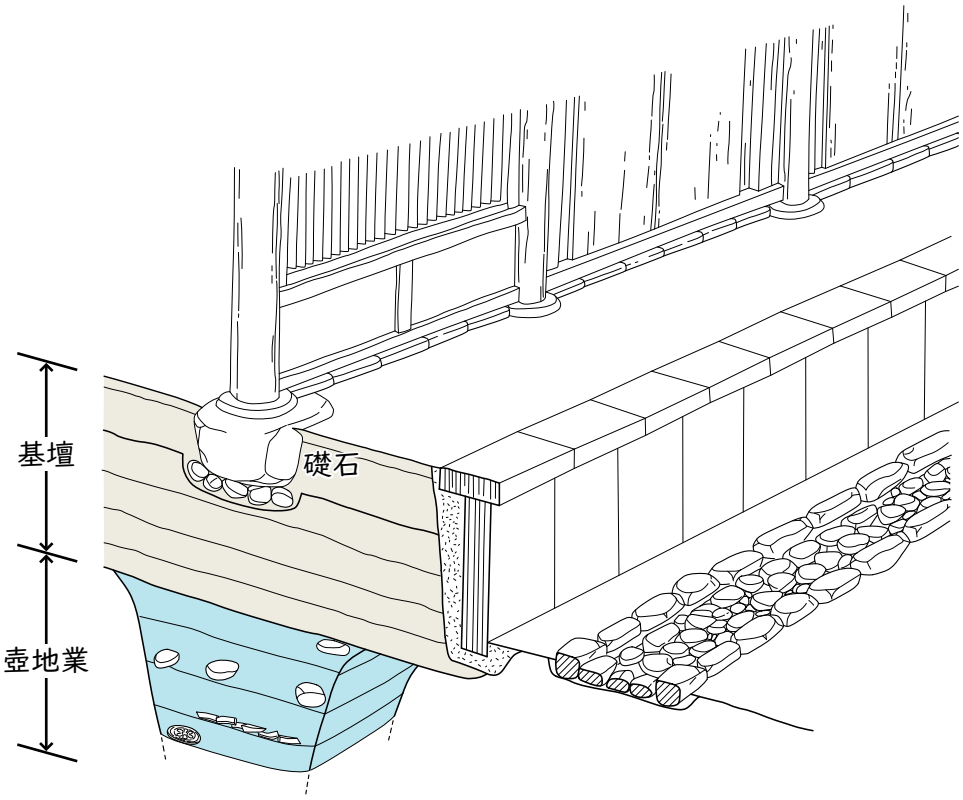

図3．弥勒金堂 基壇模式図

西大寺金堂院の復元

都城発掘調査部飛鳥・藤原地区遺構研究室長　鈴木智大

2013 年度におこなった平城第 505・521 次調査では、薬師金堂と弥勒金堂を取り囲む回廊のうち、西面回廊および東面回廊を発見し、金堂院の東西規模が判明した。宝亀 11 年（780）成立の『西大寺資財流記帳』には両金堂の規模や特徴とともに、金堂を取り囲む回廊の全長が記されている。周辺の地形を考えあわせると、南北規模も推定できる。市街地に眠る西大寺金堂院を復元する。

1　『西大寺資財流記帳』
1172 尺、東西各軒廊。多彩な建築装飾。

2　西大寺金堂院西面回廊の調査　―第 505 次調査
西面回廊／薬師金堂西軒廊

3　西大寺金堂院東面回廊の調査　―第 521 次調査
東面回廊

4　西大寺金堂院の復元
総長（資財帳）―東西規模（第 505 次調査-第 521 次調査）=南北規模
弥勒金堂と中門
幢幡遺構（掘立柱 SX1150）　―第 597 次調査

5　西大寺伽藍の復元

主要参考文献
大岡實「西大寺」『南都七大寺の研究』中央公論美術出版、1966 年。
太田博太郎「西大寺の歴史」『奈良六大寺大観 第 14 巻 西大寺 全』岩波書店、1973 年。
『平城京復原模型記録』奈良市、1978 年。
宮本長二郎「奈良時代における大安寺・西大寺の造営」『日本古寺美術全集 第 6 巻 西大寺と奈良の古寺』小学館、1983 年。
『西大寺古絵図は語る―古代・中世の奈良―』奈良国立博物館、2002 年。
佐藤信 編『西大寺古絵図の世界』東京大学出版社、2005 年。
大林潤「西大寺伽藍の造営計画に関する研究」『文化財論叢Ⅳ』2012 年。

史料　「西大寺資材流記帳」金堂院関連抜粋（底本は西大寺蔵写本。『西大寺古絵図の世界』による。〈〉は割注。《》は筆者注。）

「縁起坊地第一
　夫西大寺者　平城宮御宇
　寶字稱德孝謙皇帝、去天平寶字八年九月十一日誓願、将敬造七
　尺金銅四王像、兼建彼寺关〔矣〕、乃以天平神護元年、創鑄件像、
　以開伽藍也、居地参拾壹町、在右京一條三四坊、東限佐貴路、〈除
　東北角喪儀寮、〉南限一條南路、西限京極路、〈除山陵八町、〉北
　限京極路、
堂塔房舎第二
　金堂院
　薬師金堂一宇〈長十一丈九尺、廣五丈三尺、〉
　　盖上東西金銅沓形、各重立金堂鳳形、各咋銅鐸、盖上中間金堂
　　火炎一基、中在金堂茄形、居銅蓮花形、令持金堂師子形二頭、」
　　蹈金銅雲形、又宇上周廻火炎卅六枚、並在鋼〔銅〕瓦形、角隄
　　瓦端銅華形八枚、桶《桷》端金銅花形卌六枚、各着鈴鐸等、又
　　四角各懸鐸、堂扇《扉》幷長押、在金銅鋪肱金等、
　弥勒金堂一基〈二重長廿《十》丈六尺、廣六丈八尺、〉
　　盖東西隄瓦端、各在銅鑄枚金、又兩端金銅龍舌十枚、桶《桷》
　　端各着金銅葛形、又角各銅鐸、堂扇《扉》幷長押、在金銅鋪肱
　　金等、
　　雙廊一周〈一百十七丈二尺、東西各軒廊、〉
　　中門一宇〈長七丈八尺、廣三丈、〉
　　東西脇門二宇〈各長二丈、廣二丈八尺五寸、〉
　　中大門一基〈二重、長九丈、廣三丈七尺、〉在鐸八口、
　　東西樓門二基〈各長二丈六尺、廣二丈、〉
　　塔二基〈五重、各高十五丈、〉
　　幢六株〈二株、无鳳形、〉
　　在金銅鳳型四翼〈二破、〉牡柱並金銅頭、」

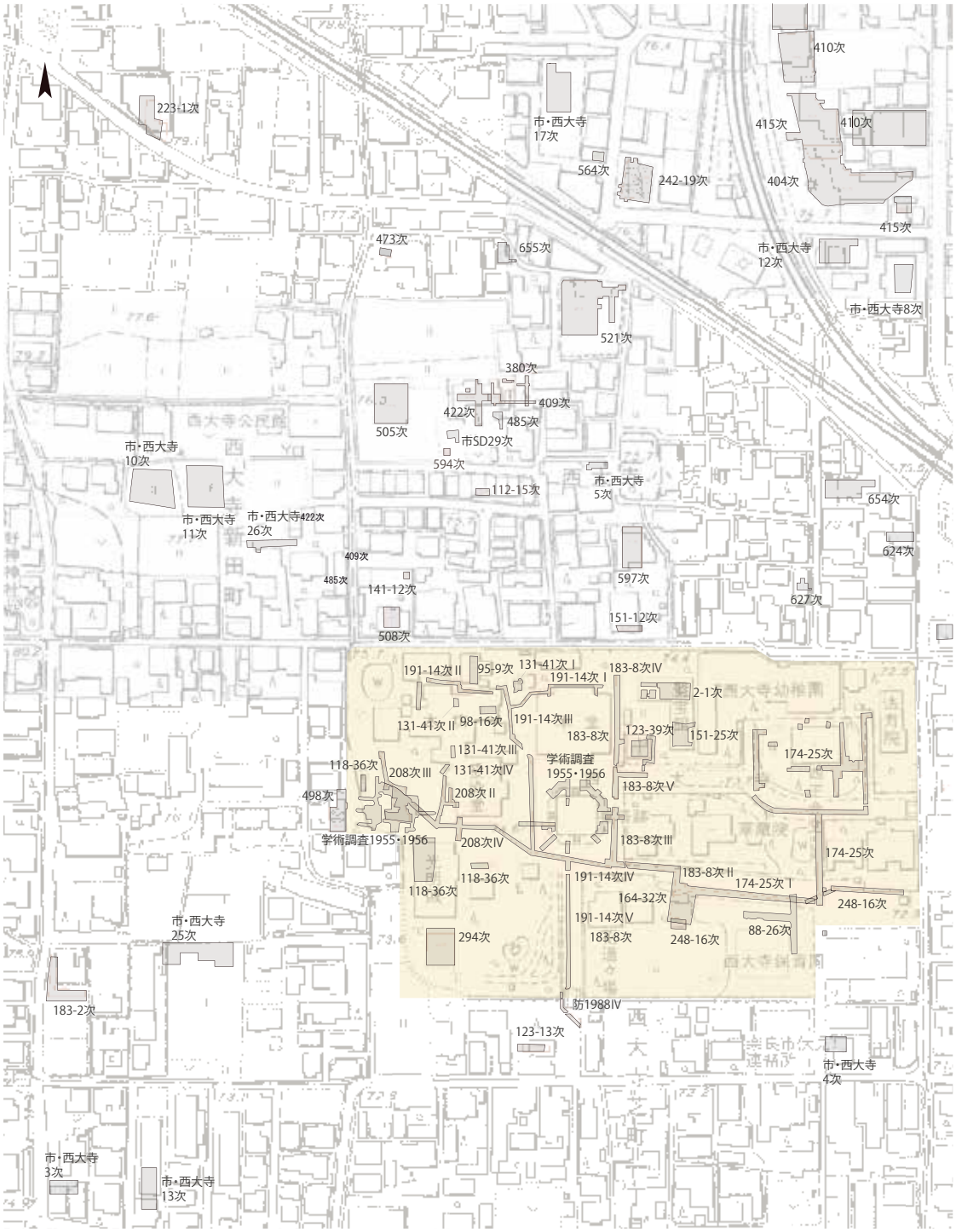

図１　西大寺旧境内の発掘調査位置図（網掛けは、現在の西大寺境内）

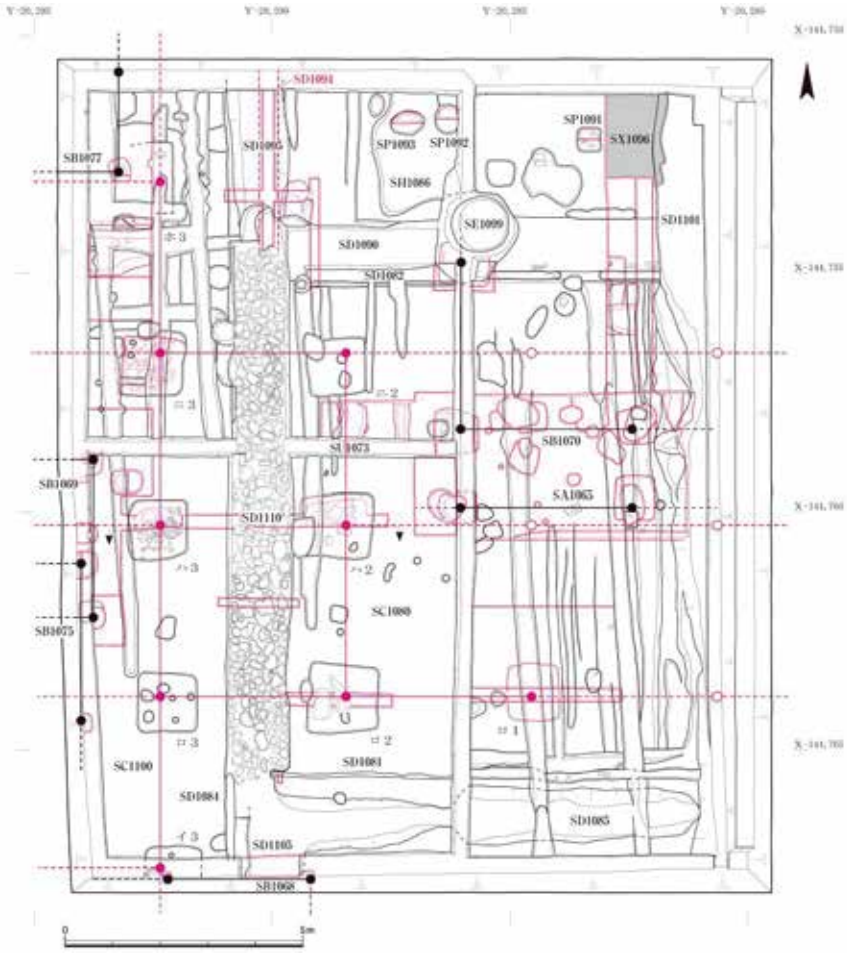

図２　平城第 505 次調査遺構図
（『紀要 2014』所収）

図３　平城第 505 次調査区全景
（西から）

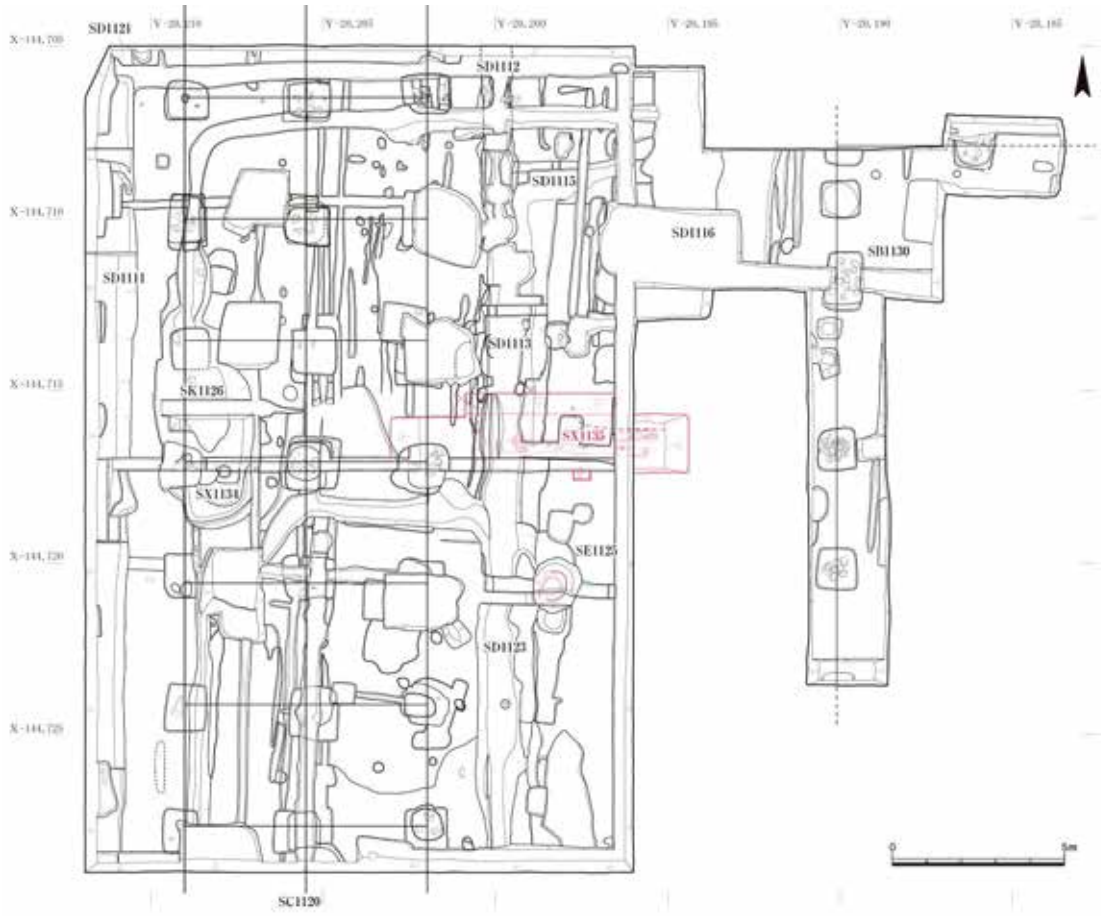

図４　平城第 521 次調査遺構図（『紀要 2014』所収）

図５　平城第 521 次調査区全景（北東から）

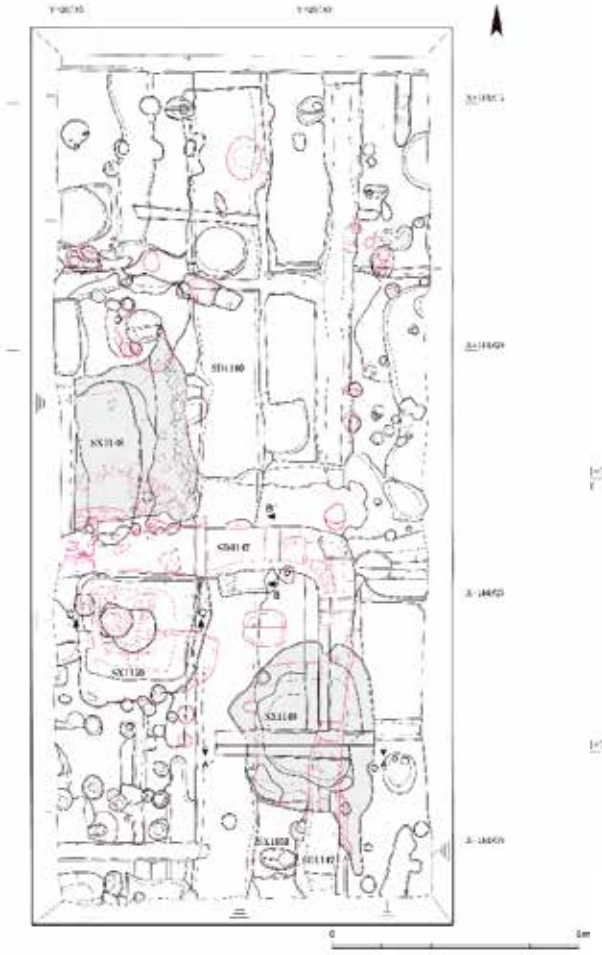

図 6　平城第 597 次調査遺構図
（『紀要 2019』所収）

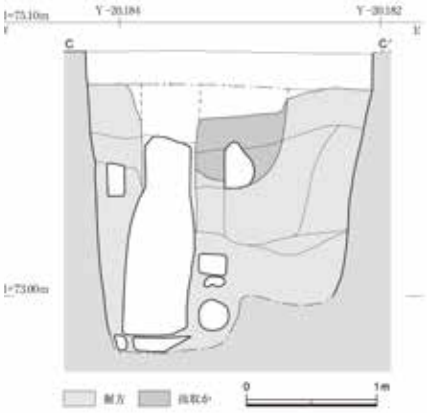

図 7　掘立柱 SX1150 断面図

図 8　掘立柱 SX1150 出土状況

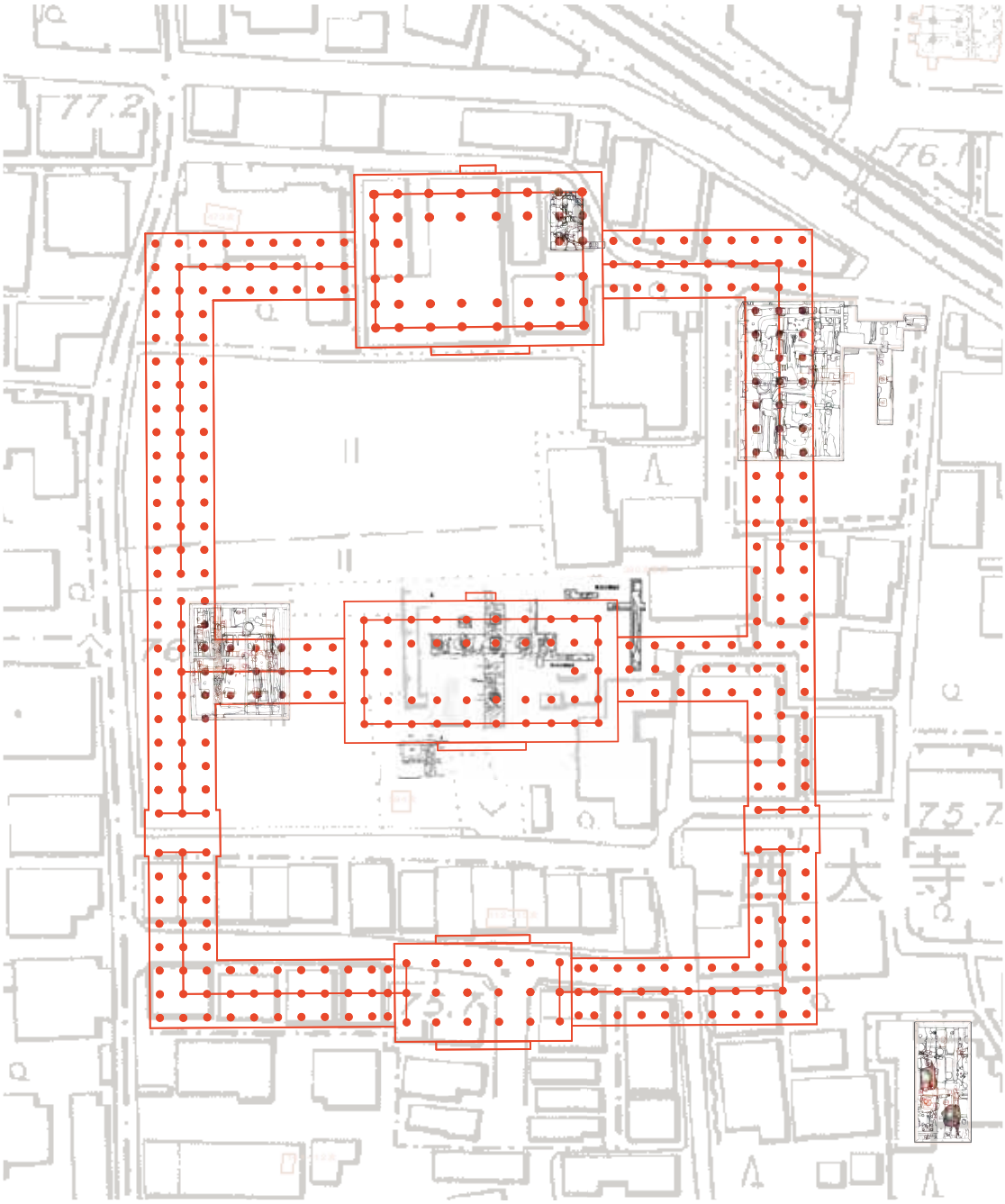

図９　西大寺金堂院復元模式図

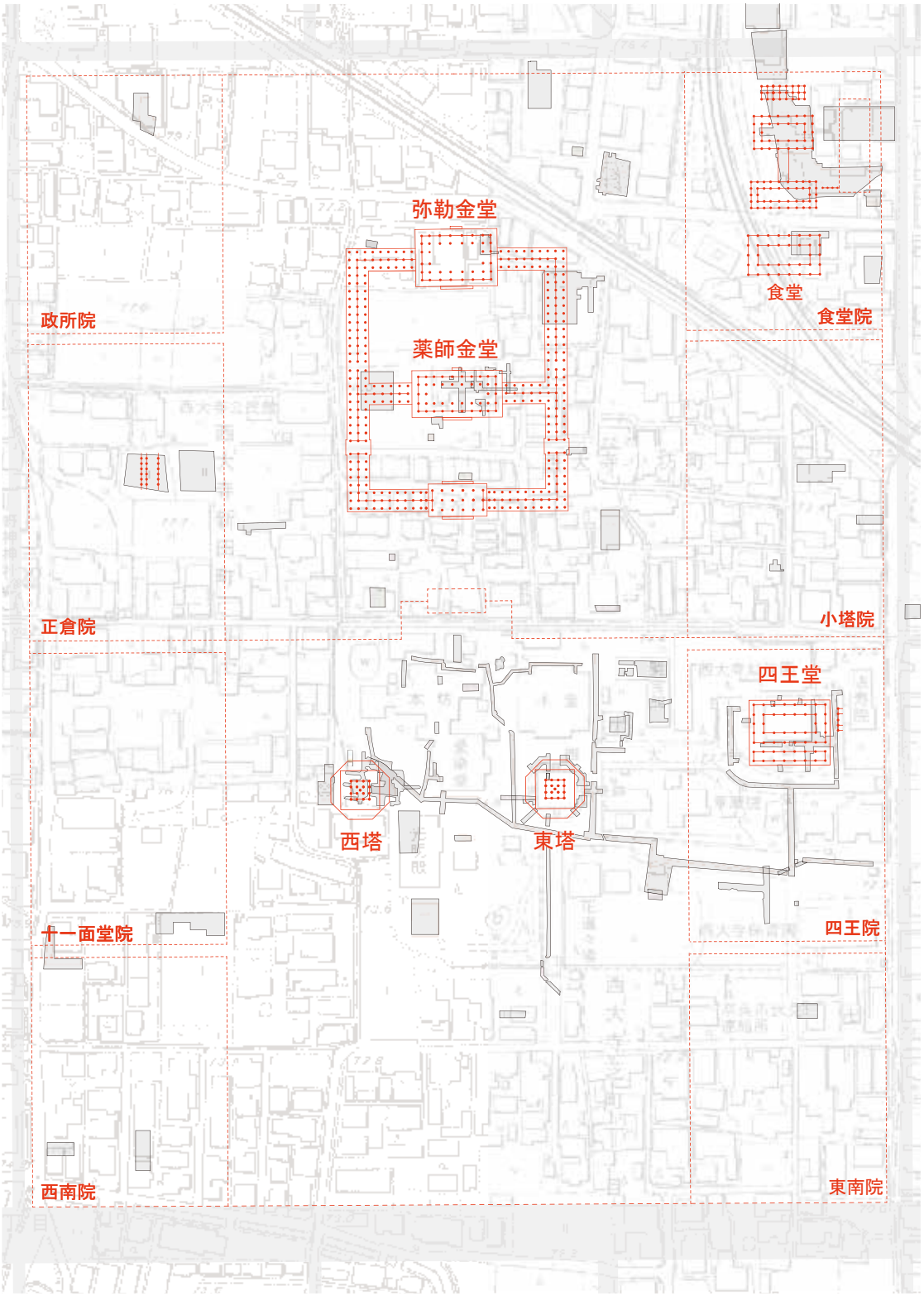

図 10　西大寺伽藍復元模式図